

「奴隷の第一の、かつ法律で明白に認められていた唯一の供給源は刑罰としての奴隷であった。罪を宣告された罪人を奴隷にすることが慣行であった。国家はこれらの奴隷を公共事業に使用したり、贈物あるいは売物として、これを個人に分配したりした。同時に経済的困難があった時代には、農民が妻や子ども、または自分自身を売却するという事実が現われはじめた。これは法律ではつねに禁じられているが、今日まで、長期にわたる慣行としておこなわれてきている。南方からの、非中国人の大規模な奴隷貿易も同時に増加しはじめ数世紀にわたって続いた。

これらのいくつもの供給源からの奴隷の数はハン時代（紀元二〇六年—紀元二二〇年）とそれにつぐ時代を通じて大へんな数にのぼったに違いないが、これを正確に評価する方法はない。うたがいもなく、これは奴隷の多くは富裕な人々によって個人的サービスのために使役され、生産的というよりは、消費的な要素であった。しかし奴隷の生産的役割も無視することはできない。農業に奴隷を使用した証拠はひろく存在している。しかし、比較的富裕な土地所有者が、どの程度に小作人、奴隷、およびその他の使用人に依存していたかを、正確な統計的基礎に立っていうことはまったく不可能である。

チン帝国の確立（紀元前二二一年）いらいの一千年間に生産の中で奴隷の演じた役割をみて、日本のマルクス主義者たちはこれを「奴隷制社会」の時代であると考えるにいたった。かれらはスン時代（九六〇—一二七九年）に支配的であった一種の小作人制度と、ヨーロッパの農奴制とが相似していることを発見し、これによって、タン時代からスン時代への移行をもって、「古代」から「中世」への画期とみなしている。しかし中国の大半の歴史家は「封建制社会」の起源をもっと昔においている。さらに、スン時代における商業の発展および一般的な文化情勢からするならば、スン時代とヨーロッパのルネサンス時代とが相似しているという論拠をきわめて有利につくり出すことができる。とするならば、タン時代からスン時代への移行は「中世」から

「近代」への移行である、との見解にみちびくことになる。わたくしは、これらの見解を和解させようとは思わない。また、わたくし自身、擬似的問題だと思ふことについてわたくし自身の見解を提出しようとは思わない。異なった文明の歴史について、いかに正しい比較と関係づけをおこなうべきかということは、またべつ大きな問題であって、ここではそれはわたくしの討論の範囲にはいれられない。

## 中国における奴隷制

R・ページ・アーンノット

(R. Page Arnot)

カール・マルクスが、一八五九年に、『経済学批判序説』の中で数百語で歴史の唯物論的概念を規定したことはよく知られている。このすばらしく要約的で考えぬかれた論文の中につきのような文章が出てくる。

「大まかにいうならば、経済的社会構成が進歩してゆく段階としてアジア的、古代的、封建的および近代ブルジョア的生産様式をあげることができ。」

『マルクシズム・ツデー』誌の社会発展の諸段階についての討論の中でとりあげられた点は、歴史の唯物論的概念の中国への適用の問題、とくに社会経済的構成の、シリーズの適用の問題であった。中国史の約四千年にわたる文書記録の中で、奴隷制はなら重要な役割を演じなかったという提言がおこなわれた。

わたくしは、既知の事実より先に出てゆく傾向があると信ずる。もし占星家が一九六二年の二月に恒星の関連について知られている事実にもとづいて世界が終りに近づいているとまちがった予言をしたならば、さらにどれほど多くのあやまりがおかされることになるであろう。事実が知られていないか、あるいはまちがった攷み方をされてい

るばあいには、不合理の上に不合理がつみ重ねられることになる。中国における奴隷制の問題は、たしかになお検討さるべき問題であり、実際中国の多くのマルクス主義学者によって、くまなく検討されつつある。もし最終的な結論が得られていないにしても、われわれは当惑すべきでない。逆に、エンゲルスのつぎのようなことばを思い出すべきだ。

「不幸なことに、人々は自分たちがいくつかなおもな原則を理解したとたんに、もはや完全に新しい理論を理解したと思ひこみ、大して苦勞することなしにそれを適用できるとしばしば考える。しかしこれらの原則さえ必ずしも正確に理解していないのだ。私は、最近の多くの「マルクス主義者」たちもこのような叱責の対象から除外することはできない。というのは、もっともばかげたことがこの連中の間でもおこなわれているからだ。」

例をあげよう。ジョセフ・ニーダムの『中国における科学と文明』（五〇年代初期に書かれた）第一巻の中に「新石器時代の失なわれた鎖の環」についてのことばが引用されている。それは、中国には旧石器時代の人間の遺物はたくさんあり、青銅時代もはやくからはじまっているのに、みがかれた石の時代である新石器時代はおどろくべきことに欠落しているということである。しかし、ケンブリッジの印刷所がこれを印刷しているときに、——この本そのものは大へん啓発的であるのだが——中国では新石器時代の遺跡が発見されつつあったのだ。私は集録された数百の遺跡の中のひとつをみた。そしていまや新石器時代の遺跡の数は軽く千をオーバーすることであろう。これらすべては一九五三—六二年の第一次および第二次五カ年計画の間にほり出されたものであった。もし単なる物質的な物で、目にみえる証拠がほんの十年ばかり前に非常に少なかったとすれば、物質的でない証拠を見つけ出すのはどれだけ困難なことであろうか。

わたくしには、中国にも奴隷制の段階があったと大いに思われる一方、その段階は存在していない——すなわちその段階は成立すること

ができないのである。なぜならばわれわれが、それがそこにあったに違いないと考えているからだ。それは証明されなくてはならない。これをマルクスの見解のせいにする必要はない。なぜなら、マルクスはそれについて述べもしなかったし、述べることができる立場でもなかったからだ。紀元前最初の一千年間の社会については一八五九年にはほとんど知られていなかったからである。マルクスとエンゲルスが知的な私たちで利用しうる資料もないような問題についてどうしてさらに述べなくてはならないというのか？

かれらはユスチニアヌス法典を使用できたし、使用したけれども、ハンムラビ法典はまだ使用できなかった。同法典によって紀元前二千年の階級社会について明らかにされたのは五〇年もあとになってからであった。マルクスとエンゲルスはいかなるばあいにも同時代の資本家的著作家によるべき理由をほとんどもたなかった。大英博物館の人たちはメソポタミアの埋もれた街や碑文を発掘するにあたって、発掘費用を得るために、バイブルのもっとも不合理なくだりが文字通り真実であることを立証しようと努力している風をよそおわねばならなかった。人類学については、きわめて少数のものはさておき、思弁的観念論者の手中にあり、かれらのうちいくらかのものは今世紀にいたるまでそれを続けた。そしてかれらの発見が副産物としてマルクス主義を完全に粉砕したと考えるおどろくべき知的ごうまんさをもっていた。

しかしながら、考古学においては、歴史の唯物論的概念は故ゴードン・チャイルドによって見事な適用が示された。かれが約二十年前に青年共産同盟のために書いたパンフレットはわが党全体と労働運動全般の間に広汎に普及しており、『マルクシズム・ツデー』誌の今日の討論の解明に役立つことであろう。

アジアにおける青銅時代とそれに続く時代を注意深く観察する必要についていわれたことは、他の大陸、すなわちアフリカの研究にさいしても最大限に強調さるべきであろう。

奴隷制と封建制。これはヨーロッパ内部においてさえ、極度に広いカテゴリーである。この三十年間の間にイスラム百科辞典を編集した学者たちは、さらに変わった形態をアジアにおいて発見した。アフリカの場合には、ノルマンの領主＝農奴制を移植しこれだけを封建制と呼ぼうとする企ては、それが封建制にほかならない場合においてさえ失敗におちいりやすい。それゆえ、これらのカテゴリーはきわめてひろく、それぞれの隷属の形態の中に多くの種類のものをふくんでいる。マルクス自身、既知の事実の固執することおよび「わたくしの西ヨーロッパにおける資本主義の創出の歴史的スケッチを、あらゆる人々が歴史的環境のいかんにかかわらず通ることを運命づけられているような一般的な道程についての歴史哲学の理論に変えてしまおうとする」くわだてにたいして警告した。二つの社会（古代および近代）の場合、そこではひとつの段階において両者の間におどろくべき類似があるのだが、マルクスは「それぞれの進化の形態を別個に研究し、しかるのちにそれを比較することによって」それぞれの場合における全然異なった結果についてのカギが容易に見えられよう、といった。しかし、マルクスはつぎのようにつけ加えている。「一般的な歴史哲学理論をなんにでも合う親カギとして使用することによっては、——こうした理論の価値はそれが超歴史であるところにあるのだ——だれもそこに到達することはできないであろう。」

## 奴隷制は支配的生産様式であったか

ジョン・サイモン

(Joan Simon)

(共産党歴史グループ書記)

社会の発展段階を設定することがなにより重要なのか。この一般的な問題は、「マルクシズム・ツデー」誌上のちかごろの論戦をぎんみするにさきだつて、また共産党の編集局委員会および歴史グループがさ

る三月十八日マルクス・ハウスで開いたこの問題にかんする討論会での議論を要約するにさきだつて、ここでふれておかねばならないであろう。

いま問題になっているのは、ことなる社会諸形態の性質と継起であるが、そこには一つの形態から他の形態への移行の仕方、いかえると人間の歴史の運動と方向がふくまれている。いうまでもなくこれはきわめて広範な論題であつて、唯物論的にこの問題と取組んだ歴史をひとまとめに要約することはむづかしい。しかしレーニンは例のとおり、本問題の核心を要領よくまとめている。それによると、マルクス以前の歴史記述は「よくいっても、手あたりしだいに集めたままの事実の集積や歴史過程のある側面の描写を提供するのが関の山である。相対立する諸傾向の総体を検討し、それらの傾向をさまざまの社会階級の正確に規定することのできる生活条件、生産条件に帰し、種々の「支配的な」観念をえらびだしてそれらに解釈をくだすにあたり、主観主義や恣意を追いだし、いっさいの観念、いっさいの傾向には例外なく物質的生産諸力の条件のなかにその根源があることをあばきだし、そうすることによってマルクス主義は社会経済構成の発生、発展、衰退の諸過程にかんする包括的で深みのある研究の仕方を教える。」（『カール・マルクスの教え』レーニン小文庫、二四ページ）

マルクスおよびエンゲルスは史的唯物論が事実にもとづく一般化への科学的アプローチであることをつねに力説した。したがって、かれら二人は継起する社会諸構成の図をかきあげることができるようになるまでには計りしれぬほど多くの歴史研究が必要であることをよく知っていた。「われわれの歴史観は、なによりもまず研究の指針であつて、ヘーゲル流の推論をするためのテコではないのだ」と一八九〇年付の一手紙でエンゲルスは書いている。

「すべての歴史は研究しなおさねばならない。さまざまの社会構成の存立条件からそれらに対応する政治的、法律的、美的、哲学的、宗教的その他の観念を演繹しようとする前に、前記の構成の存立条件を